Ｐａｎｉｃ　Ａｔｔａｃｋ！

下弦　真宵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｐａｎｉｃ　Ａｔｔａｃｋ！

【Ｎコード】
Ｎ６５６８Ｙ

【作者名】
下弦　真宵

【あらすじ】
体が異常に頑丈な以外、これといって特徴のない高校生、本条雪匡。彼の日常はまさに天国と地獄だった。でもどちらかというと天国に近い地獄だった。だがある日突然、その日常が修羅場と化す。突撃してくる美少女二人。彼の運命や如何に！？　ＴＳ性転換モノであり、恋愛要素を過分に含みます。苦手な方は気を付けて下さい。尚、ヒロインが主人公を好き過ぎて病んでいく可能性があるのでご注意！

叶わぬ願いと知りつつも

ついにこの日が来た。
叶わぬ想いを諦めきれず、十年もの歳月が流れてしまった。
日々苦しくて切なくて。
目の前に愛する人がいるのに、いつもそばにいてくれるのに。
一番近くにいるはずなのに、一番遠い存在。
優しい笑顔も、優しく肩に手を置いてくれることも、全ては友達として。
最高に楽しい日々であり、最高に絶望を味わう日々。

その楽しくも残酷で無慈悲な日々が、本屋で見つけた一冊の本との出会いでついに終わりを迎えようとしている。

「じゃーん！　幼稚園児でも気軽に悪魔を召喚できる優しい魔術入門！　いやぁ、この本を見つけた時は泣いて喜んじゃったねぇ。まさに運命の出会いだよねぇ」

背中に生える蝙蝠のような黒い羽。お尻から伸びる先端が矢印の黒い尻尾。悪魔と呼ぶにはちょっと可愛いんじゃないかな？　と思える水着姿の女の子が表紙に描かれた薄っぺらい本。
そして帯に書かれた紹介文。

『これで今日からあなたは天才魔術師！　遊ぶ時はお父さんかお母さんと一緒に遊びましょう！　そして楽しく遊んだら本棚にきちんとしまいましょう！　小悪魔ちゃんからのお願いです』

注、対象年齢三歳以上。

ふふふ、ただの魔術師じゃない。天才魔術師になれるんだ。
対象年齢がだいぶ低いけど、以上なんだから問題ない。
この本さえあれば、僕の望みが叶えられるはずだ。

この本は暗記するほど何度も読み返した。だから本の内容は僕の頭の中に完璧に入っている。
しかもこの本は凄く理解しやすかった。
なにせ表紙の女の子の小悪魔ちゃんが進行役となり、とても分かりやすく説明しながら魔術の基礎から応用までを知っていく構成になっていたから。

まずは場所。

『人に迷惑のかからない広い場所で遊びましょう』

これは近くに公園があったからそこに決めた。この公園には芝生広場とグラウンドがある。地面に魔法陣を描かないといけないからグラウンドを選択。そして今現在はそのグラウンドにいる。
ノルマクリア。

次は服装。

『黒い服（ローブ）を着ましょう。黒いワンピースでも大丈夫だよ』

ローブはない。というより、ローブってなんなのかよくわからない。代用品としてワンピースとあるけど、黒いワンピースどころかワンピース自体を持っていない。
でも大丈夫。お母さんの冠婚葬祭用の黒いワンピースを拝借した。
バレたら怒られそうだけどノルマクリア。

次は道具。

『杖。もし杖がなかったらお父さんに作ってもらってね。（お父さんにお願い。硬いと危険なのでスポンジを巻くか布を巻くなど加工をしてお子様にお渡しください）』

さすがに杖はなかったから、公園に落ちていた木の枝で代用。それと僕はお子様じゃないからスポンジも布も巻かなかった。

ノルマクリア。

次は材料。

『材料はお花（その辺に生えているお花で大丈夫だよ）を用意してね』

花は公園の芝生広場に咲いていたシロツメクサを使用。

ノルマクリア。

最後は魔法陣。

『杖を使って地面に丸を描いて、その中に三角を二つ（六芒星）描きましょう』

かなりシンプルな魔法陣だ。一分で描けてしまった。

きっとこういったシンプルな物こそが本物なんだろう。

ノルマクリア。

気になったのは魔術を行う時間だ。本には召喚魔術を行う時間の規定は特に無かった。

いつでもいいってことなのかな？
とりあえず人目につく時間は避けたかったし、それに雰囲気を出したかったから深夜の二時をチョイスした。
草木も眠る丑三つ時って言うし、なんだか上手くいきそう。

あとは魔法陣の中心に花を置き、本の最後のページにある呪文の詠唱が録音された付録のボタンを押すだけだ。
小悪魔ちゃんの説明によると、小悪魔ちゃんが呪文を一節詠唱したら、復唱すればいいとのこと。
さらに召喚の儀式に必要な舞を舞わなければいけないようだけど、これは気持ちがこもっていれば特に決まりはないようだ。

芝生広場で摘んできたシロツメクサを魔法陣の中心に置き、数歩離れて本の最後のページを開く。
全ての準備は整った。

よし、始めよう！

ドキドキと高鳴る胸。緊張の一瞬。震える指先。
唾を飲み込み、ボタンを押した。

『よい子のみんなー！　こーんにーちわー！　小悪魔ちゃんでーす！』

本から聞こえてきた元気な少女の声。これが小悪魔ちゃんの声か。
想像とちょっと違う。
ってそうじゃない！　復唱しないと！

「よ、よい子のみんなー！　こーんにーちわー！　小悪魔ちゃんでーす！」

舞は自由だからとりあえず右手を上げて声を張り上げる。

『元気なお返事をありがとー！　みんなは小悪魔ちゃんを召喚できるかなー？　じゃあ元気に踊っちゃえー！　レッツゴー！　イェーイ！』

「げ、元気なお返事をありがとー！　みんなは小悪魔ちゃんを召喚できるかなー？　じゃあ元気に踊っちゃえー！　れっつごー！　いぇーい！」

必死に復唱しつつ、いぇーい！　で思いっきり飛び跳ねる。

そして、本から聞こえてきたズンチャカズンチャカというアップテンポの明るい伴奏。

その伴奏に続いて小悪魔ちゃんの詠唱が始まり、僕もそれにならって踊りながら復唱を続けた。

『ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！』

「ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！」

『いぬさんしっぽをふーりふり！』

「いぬさんしっぽをふーりふり！」

次々と上げられる動物の名前。恐らく生贄をなぞらえているんだろう。

額に浮き出た汗。夢中で踊りながら復唱する。

ただ一つの願いを叶えるために。

『さー！　よい子のみんなー！　いっくよー！　ワンツーさんしー！　イェーイ！』
「さー！　よい子のみんなー！　いっくよー！　わんつーさんしー！　いぇーい！」

アップテンポの伴奏のリズムが最高潮に達する。
いよいよクライマックスか。

ただひたすら踊り、そして復唱した。

『みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！　小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！　でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかなければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきっとまた会えるよ！　それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！　じゃあね！
まったねー！　バイバーイ！』
「みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！　小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！　でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかなければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきっとまた会えるよ！　それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！　じゃあね！
まったねー！　バイバーイ！」

両手を上げて夜空を見上げた。
プツッ、と録音された音が切れる
頬を伝う雫。

肺が酸素を求めて僕に呼吸をしろと急かす。
運動はあまり得意じゃないけど、それでも出来る限りのことはやった。
あとは結果がついてくることを願うしかない。
「そう言えば、召喚魔術が成功したとして、どれくらいでわかるんだろ？」
両手を上げて空を見上げたまま、ふと気になったことを呟く。
本には魔術が成功した場合の説明はなかった。
まあいっか。待っていればわかることだし、気長に待とう。

どれくらい待ったろう。三十分は経っただろうか。
魔法陣にこれといった変化は見られない。
「ちょっと冷えてきたなぁ。汗かいたからなぁ。着替えを持ってくればよかったなぁ」
時間は午前二時四五分。ちょっと寒くなってきた。
首に汗拭き用のタオルを巻き、震え出した自分の体を抱き締める。

腕時計は午前四時を記している。
その場に座り、膝を抱えてひたすら魔法陣を見つめた。
「ワンピースって下がスース―する」
膝に顔を埋めて縮こまり、寒さに耐える。
まだ失敗と決まったわけじゃない。本には召喚にかかる時間が記載されてはいなかった。
まだ待ってみる価値は十分にある。

僕は眩い朝日を眺めていた。寒かった体も、朝日の暖かさで震えが止まった。
結局召喚は失敗した。きっと僕のせいだ。儀式の手順を間違えたか、それとも想いが足りなかったのか。
でも僕は諦めない。僕の想いは本物だ。
絶対に諦めない。
それから数日に一度、公園に出向いては召喚の儀式を行った。
絶対に諦めない。諦めるわけにはいかない。
『ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！』
「ねこさんにゃんにゃんにゃおんにゃおん！」
『いぬさんしっぽをふーりふり！』
「いぬさんしっぽをふーりふり！」

本当は知っている。こんなものがまやかしだってことは。
でもたとえまやかしだとしても、僕は信じて召喚魔術を続ける。
信じなければ、続けなければ、このままだと僕は狂ってしまう。
彼が、雪くんが僕に笑いかけてくれる度に、僕の胸は締め付けられて悲鳴を上げる。
雪くんが僕の肩に手を置いてくれる度に、心臓が張り裂けそうなほどに鼓動して、僕の全てを捧げてしまいたい衝動に駆られる。
僕はおかしいんだろうか？

『さー！　よい子のみんなー！　いっくよー！　ワンツーさんしー！　イェーイ！』
「さー！　よい子のみんなー！　いっくよー！　わんつーさんしー！　いぇーい！」

僕は男だ。そして雪くんも男。
だからと言って、男性が好きなわけじゃない。雪くんだから好きなんだ。
もし雪くんが女の子なら、やっぱり雪くんが好きだ。
だけど、僕と雪くんは男だ。同性だ。愛し合うことはできないし、その想いを打ち明けることもできない。
言えばきっと、雪くんは僕から離れて行ってしまうだろう。
それは嫌だ。絶対に嫌だ。雪くんが離れて行ってしまうくらいなら、今のままの方がいい。
だけど、やっぱりつらい。

いずれ雪くんを誰かに奪われると考えただけで、目の前が真っ暗になってしまう。

『みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！　小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！　でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかなければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきっとまた会えるよ！　それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！　じゃあね！　まったねー！　バイバーイ！』

「みんな凄く元気でおりこうさんだったよー！　小悪魔ちゃんも凄く楽しかった！　でも残念ながら、小悪魔ちゃんはたくさんのお友達に会いにいかなければなりません。でもみんなの元気な姿は忘れません。それにきっとまた会えるよ！　それまでパパとママの言うことをきちんと聞いて、おりこうさんにしててね！　じゃあね！　まったねー！　バイバーイ！」

両手を上げて夜空を見上げる。

もう何度この儀式を繰り返したろう。

僕の望み。それは女の子になること。女の子になって、雪くんの一番そばにいること。

まやかしなのは知っている。でも、今の僕にはすがるものが必要なんだ。

「なァ、声をかけるかどうしようか物凄く迷ってたんだけどさ、あんたは危ないヤツか？」

突然後ろから聞こえた女性の声。

振り返ると、そこにはコンビニの袋を持った若い女性が立ってい

た。
僕が怪しい行動を取っている自覚はある。でも、目の前の女性も僕と同等以上に怪しかった。
とても綺麗な人なんだけど、長い黒髪はボサボサ。着ているのは緑色のジャージ。しかも胸にはネームがついていて、二年五組田中、という名前が記されている。
そのジャージには見覚えがある。僕の中学のジャージだ。しかも丈が足りてない上に、女性はどう見ても十代後半か二十歳くらい。
そして素足にサンダル。
ダルそうに僕を見るその女性は、ガリガリと頭を掻いて眠そうに欠伸をしている。
物凄く怪しい。
「ぼ、僕は怪しい人間です。こんな時間に公園で踊っている人間は怪しいです。近寄らない方がいいですよ」
できれば関わり合いになりたくなかったから、自分が怪しい人間だとアピールした。
「そっか、安心した。ホントに怪しいヤツは自分を怪しいって言わねーし。あたしはベルゼだ。よろしく」
そう言って右手を差し出す田中ベルゼさん。
マズい。なんだか気に入られてしまった。関わりたくないんだけど。
でもなんとなく悪い人じゃないような気がするし、軽く話して適

度に切り上げよう。

「僕は椎名綾瀬です。はじめまして」

差し出された右手を取って握手した。

「それにしてもさ、あんた気をつけた方がいーよ？　こんな夜更けに女の子が一人で公園で踊ってるなんてさ。しかもあんたみたいに可愛い子ならなおさらだよ。襲ってくれって言ってるようなもんだろ？」

「あ、いえ、僕は男なので大丈夫です」

「は？」

田中さんが目を見開いて僕を見つめる。

「いやいやいや、いやいやいやいや！　それは無理があるだろ？どっからどう見ても女の子だし、つーかそこら辺の女より全然かわいーし。もしかしてあたしをからかってるのか？」

「からかってません。僕は男です」

「まだゆーか」

呆れたようにジト目で僕を見る田中さんは、ボサボサの頭を掻いてため息をはく。

「まあいーや。んで、こんな夜更けにこんな所で踊ってなにしてんだよ。実は結構前から知ってたんだけどさ、怪しくて声をかけらんなかったんだよね。なんかおっかねーし」

「それは……」

なんて答えたらいいのかわからない。

魔術なんて非科学的なものが存在しないことくらい、僕にだってわかる。

「言いづらいことか？　まあいーや、無理して言うこともねェよ」

握手していた右手を離し、頭を掻いた田中さんは、ダルそうにため息をはいてそう言った。

「ん？　なんだこの本？　それとこれは……魔法陣のつもりなのか？」

「あっ、それはっ」

地面に描かれた魔法陣と、その横に置いておいた魔術の入門書。それを見つけた田中さんは、本を拾ってマジマジと見つめる。

「魔術か。そっか、あんたは叶えたい望みでもあるのか。だからここで踊ってたわけか」

本のページを捲りながら、ブツブツと呟いている。

「対象年齢三歳以上って……ガキのお遊びかよ。残念だけど、この術式じゃ召喚魔術は――」

「知ってます！」

声を張り上げた僕を驚いた表情で見つめた田中さんは、にやりと不気味な笑みを見せた。

背筋に悪寒が走る。

「知っててやってたのか。おもしれーヤツだな。叶わぬ望みと知りながら、か。純粋なんだな。なるほどね、どーりでこんなチンケな

術式であたしに干渉できたわけだ」
「え？」
「いや、こっちの話。つーかあんたが儀式を行うたんびに煩くてさ。こっちはネトゲに集中したいっつーのに。まったく、サタンのボケの目を盗んでせっかく地上界に遊びに来たってのによ」
「は？」

頭をガリガリと掻いて不機嫌そうに呟く田中さんは、でもちょっとだけ嬉しそうに見えた。

「あんたさ、もし世界を手にする力をやるっつったら、今の望みとどっちを選ぶ？」
「今の望みです」
「おいおい、悩みすらしねーのかよ？　ちょっとは悩もーぜ？　世界だぞ？　世界を手に入れたら望みなんてなんだって叶うだろ？」
「世界なんていりません。僕の望みは一つです」

不機嫌そうだった田中さんが、次第に真顔になっていく。

「金は？」
「いりません」
「名声は？」
「いりません」
「権力は？」
「いりません」

僕に質問をする度に、田中さんの表情は険しくなっていった。
田中さんは真剣だ。本当に真剣に僕に質問している。
だから僕も真面目に答えなければならないと思った。

「望みはなんだ？」
「女の子になることです」
「それでどうする？」
「雪くんに告白します」
「振られたら？」
「それでも告白します」
「それでも振られたら？」
「それでも、それでも告白します」

振られたら、その言葉に涙が出そうになった。

「ウザいって言われたら？　キモいって言われたら？　消えろっていわれたら？　あんたはどうする？」
「う、ウザいって……キモいって……僕は、僕は……」

言われたくない言葉だった。考えないようにしていた言葉だった。
でもそれが現実。田中さんの言葉は僕の心に突き刺さった。

「あんたは女として生きていけんのか？　ソイツのために女になって、ソイツから消えろって言われたら、それでもあんたは生きていけんのか？」

瞳から涙が溢れ出す。
現実だ。それが現実だ。たとえ僕が女の子になったとしても、雪くんが僕を好きになってくれる保証はどこにもない。
それどころか、僕を蔑んだ目で見るかもしれない。気持ち悪がって罵声を浴びせるかもしれない。

消えろって言われたら、僕はどこへ行ったらいいんだ。

でも、それでも……僕は雪くんが好きだ。

膝が震え、前のめりに倒れる。

その僕を田中さんが咄嗟に抱き止めてくれた。

「あんたを苦しめるつもりはねェんだけどさ、でも大切なことなんだ。最後まで答えて欲しい」

真面目で優しい田中さんの声。

返事はできなかったけど、頷くことで自分の気持ちを伝えた。

「雪くんっつったか。ソイツの心を意のままに操れるとしたら？あんたはどうする？」

「……そんなの、そんなのは……雪くんじゃない」

「そうか、あんたはあくまでも自分を見て欲しいんだな。今のままのあんたを見て、そのあんたを好きになって欲しいんだな。そうか、そうか……つらい質問をしてごめんな」

田中さんは僕を抱き締めたまま頭を撫でてくれる。

「はぁーあ、力を使っちゃうと地上界に遊びに来てんのがバレちゃうんだよなぁ。悠々自適なネトゲ三昧の日々も終わっちゃうのかぁ。でもまあ、しゃーないよなぁ。この子のこと気に入っちゃったしなぁ」

ガックリと肩を落とした田中さんは、一際大きなため息をついて僕を離すと、複雑そうな表情で僕の頭を軽く叩いた。

「天使は望みを叶えちゃくれねぇ。所詮アイツラは戒律に縛られてるからな。そんであたしら堕天使は、その戒律を破って人間を愛し

た天使なんだよ」

優しい瞳で僕を見つめ、相変わらずポンポンと僕の頭を叩く田中さん。

「あたしらは人間に幸せになって欲しい。だから純粋な願いを持ったヤツのささやかな望みをたまに叶える。だけど、その望みがソイツを幸せにするとは限らねェ。そうやって結局不幸になったヤツラがあたし達を悪魔って呼んだんだよ」

「え？　あく……ま？」

僕から離れた田中さんは、そのまま数歩後ずさりして立ち止まると、大きく息を吸い込み、ビシッと僕を指さした。

「椎名綾瀬ェっ！　最後の質問だコルァッ！　なりたい胸のサイズを言えコノ野郎ォっ！　特別サービスで好きなサイズにしてやんぜェっ！」

「へ？」

む、胸？　はい？　いきなりそんなことを言われても。

えーと、えーと、確か雪くんはDカップが好きとかなんとか言っていたような気が。

「ディッ、Dカップで！」

「また随分と曖昧なことを言いやがってコノ野郎ァっ！　Dにも色々とあんだろうがバカ野郎ォっ！　まあいいっ！　困るくらいの美乳にしてやんぜェっ！」

「は、はぁ……」

再度ビシッと僕を指さした田中さんは、夜空を見上げて両手を広

げる。

「我が名は獄界の王ベルゼブブ！　ネトゲ三昧の日々を失うのはちとせつねェけど！　我が名を持って椎名綾瀬の望みを叶える！　文句があるヤツァ上等だァ！　このあたしが直々にタイマン張ってやんぜコルァ！」

突然の地鳴り。田中さんが立っている地面が赤く光り輝き、円形の幾何学的な文様が浮かび上がった。

魔法陣。

僕が描いたものとは明らかに違う。複雑で精巧な輝く魔法陣の赤い光が田中さんを包む。

眩暈がする。冷や汗が止まらない。心臓が破裂しそうなほどに高鳴る。

そして背筋を寒気が駆け上がっていく。

本物だ。本物の魔術だ。田中さんは魔術師だったのか！？

「チッ、もう気づきやがったか！　サタンの野郎、張ってやがったな？　クソッタレがァ！　段取り無しでの力の行使だけどよ！　このあたしを舐めるんじゃねェ！」

田中さんを包む赤い光が大きくなる。その田中さんより少し離れた場所に新たな魔法陣が浮かび上がり、その中から人影らしきものが浮かび上がった。

「ベルゼさまぁ！　どうしてこのサタンめを置いていかれるのですかぁ！　サタンめは寂し過ぎて死んでしまいそうでしたぁ！」

魔法陣から出てきたのは、繊細な刺繍が施された鮮やかで豪華な黒いドレスを着た女性だった。
頭に飾った黒いバラ。地面にまでつく長い黒髪。大きくて綺麗な赤い瞳。透けるように白い肌。
今まで見たことも無いような綺麗な女性だった。

「なら死ねよっ！　キモいんだよテメェはよォっ！」

その女性に向かって容赦なく暴言をはく田中さんは、ぺっぺっと唾まではいた。

「まあ、まあっ！　あの小娘はなんですかっ！　私と言う女がありながら！　ベルゼ様の恋の奴隷は私一人で十分ですっ！　それなのに……そこのあなたっ！　あなたねぇ、ちょっと可愛いからって図に乗らないでよっ！」

なぜか僕にあからさまに敵意を剥き出しにした女性は、ズカズカと僕の方へ歩いて来る。
なに？　え？　なんなの一体？　なんで僕を殺すみたいな目で見てるの？

「ぶっ飛べこの変態がァ！　しゃーんなろォー！」

その場で正拳突きを繰り出す田中さん。その拳は大気を震わせ、空間を歪ませるほどの衝撃波を伴って女性を襲う。

「ふんっ、術の二重行使でベルゼ様らしからぬ力の脆弱さですこと。このような攻撃は軽く消滅できますけど、せっかくなので受けます！　きゃあ！」

かわす意志も防御する素振りも見せず、そのまま衝撃波を喰らった女性は、数十メートルほど吹き飛び、公園の周りを囲んでいる大きな木に衝突した。

は？　え？　ええー？　し、死ん、死んだんじゃない？

僕の心配をよそに、むくっと普通に起き上った女性は、ガクガクと震えながら自分を抱き締めている。

瀕死だ。普通に起き上ったけどやっぱり瀕死なんだ。当たり前だ。数十メートルも吹き飛ばされて、その挙句に木に激突したんだ。

救急車を呼ばないと死んでしまう。

「ああ、ああ！　ベルゼ様の愛の鞭！　体が熱い！　燃えるように熱い！　この痺れるような快感が堪らないわ！　私ったらなんてふしだらな……まだご命令がなにのに達してしまうなんて……私はなんてふしだらな女なの！」

暗い上に遠目でよくはわからないけど、救急車を呼ぶよりこの場から逃げた方がいいような気がするのはどうしてだろう。

「キモいよー、アイツキモいよー。やだよー、やっぱ帰りたくねェよー」

田中さんも僕と同じ感覚なのか。引きつった顔でガタガタと震えている。

「ベルゼさまぁっ！　このふしだらなサタンめをお仕置きしてくださいませぇっ！」

赤い瞳が燃え上がり、信じられない速度でこっちに向かって突進

してくる。

「ひぃぃぃぃっ！」

「ひぃぃぃぃっ！」

それを見た僕と田中さんが、同時に悲鳴を上げた。

「いやだー！　こっちくんなー！　鳥は飛ぶことこれあたわず！　獣駆けることこれあたわず！　縛ることこれ禁なり！　鉄鎖縛錠！」

田中さんの叫びと同時に、地面を突き破って巨大な鎖が何本も飛び出し、こっちに突進してくる女性を縛り上げる。

一本三十センチくらいの太さの鎖。あんなので全身を縛られたら確実に死ぬ。

「あ……くぅ。もっと……もっとぉっ！」

全身を巨大な鎖で雁字搦めにされて、でも痛がるどころかニタニタと笑い、息を荒げながら顔を上気させて、まるで何かを求めるように叫び声を上げる女性。

「ひぃぃぃぃっ！」

「ひぃぃぃぃっ！」

それを見た僕と田中さんが、同時に悲鳴を上げた。

「た、田中さん……なんなんですかあの人。気味が悪いですよ」

「だろ？　だろ？　アイツキモいだろ？」

涙目で田中さんを見る僕と、涙目で僕を見る田中さん。

「あー、キモい。あー、寒気がする。って今はそれどころじゃねェな！　椎名綾瀬ェ！　約束しろォ！」
「え？」

田中さんを包み込んだ赤い光が、高熱を帯びた炎のように燃え上がり、その中で田中さんはニッカリと笑う。

「あたしがお前を女にしてやる！　この世界の理を書き換えてな！　でもそこからはお前の努力次第だ！　いいか！　必ず幸せになれよ！」
「は、はい！」

僕が頷くと同時に、燃え上がった赤い光は巨大な奔流となって夜空を突き破った。

静かな公園。
見上げると夜空には星が瞬いている。
鎖が突き出した地面は何事も無かったように元通りになり、その鎖に縛られた女性も消えている。
そして、僕に「幸せになれ」と言ってくれた田中さんの姿もどこにもなかった。

「夢……だったのかな？」

呟いた僕の頬を冷たい夜風が撫でた。

変則的な両想い

眩しさに薄目を開ける。

「朝か……」

カーテンの隙間から溢れた朝日が俺の顔を照らしていた。
枕元の時計を見ると、朝の六時半。
まだかなり眠いが、このまま二度寝するわけにはいかない。

「七時半には綾瀬が迎えに来るからな。準備しねェと」

ベッドから起き上がり、大きく伸びをして欠伸をする。
今日もまた、最高に楽しくて最高に残酷な一日が始まりを迎えた。

階段を下り、洗面所へと向かう。
顔と頭を洗って寝癖を直し、歯を磨いて着替えを済ませる。

「なんで俺は早起きしてまで毎朝髪を洗うのかね。なんかなぁ、綾瀬にだらしない所を見られたくねェんだよなぁ」

いつも元気で可愛い綾瀬。
幼稚園からずっと一緒。俺の親友であり、そして初恋の相手でもある。

俺は変なんだろうか。ああ、間違いなく変だ。

綾瀬は男だ。それは間違いない。なにせ昔は共に立ちションをした仲だしな。男なのは間違いなく確実に確認している。

だけど。

「なんでアイツはああも可愛いんだ。どうしても男に見えねェ」

綾瀬が可愛いのは近所でも評判だし、学校でも校内一可愛い男の子として有名だ。

はっきり言うと、綾瀬の可愛さは断トツだ、次元が違う。ウチの学校どころか、この界隈で綾瀬より可愛い女を俺は見たことがねェ。

しょうがないんじゃないのか？　あれだけ可愛くて性格もいいんだから、好きになっても仕方がないんじゃないのか？

現に綾瀬は女よりも男に告白される比率が高い。まあ、とは言っても綾瀬が男だとバレるまでは、だけど。

高校に入学した時は凄かった。学校内が綾瀬の話題で持ちきりだった。

俺を含めて綾瀬を知っている者達は、またかって感じで傍観してたけど。

そして、そんな綾瀬は傷つきやすくて弱い所がある。

アイツはちゃんと男子学生用の制服を着てるし、自分を男だとはっきり言う。

でも、大概のヤツは信じない。特に初対面のヤツは。

そういうヤツラは勝手に綾瀬を好きになり、男だと知るや否や手の平を返したように綾瀬を攻める。

紛らわしいんだよ！　女の振りしてんじゃねェよ！　変態かよ！

男に告白してしまったことを、綾瀬のせいにすることによって取り繕うんだろう。

身勝手だ。綾瀬は何も悪くない。ただ普通より可愛いだけだ。

でも綾瀬は何も言い返さない。一人で悲しんでいるだけだ。

そんな綾瀬を俺はずっと守ってきた。と言っても俺は大したことをしていない。

ただ綾瀬のそばにいただけ。周りからはホモだの変態だのと罵られたけど、そんなの痛くも痒くもねェ。

あれは小学生の時だったか。体が弱く小さかった綾瀬は、友達と遊ぶとついて行けなかった。

俺もガキだったし遊びたかったけど、一人で寂しそうにしている綾瀬をどうしても放っておけなかった。

そのせいで俺は友達から距離を置かれるようになってしまった。

だから俺はいつも綾瀬のそばにいた。綾瀬も俺にべったりだった。

まあ、俺が綾瀬のそばにいたのは、単に綾瀬が可愛かったからという理由もある。なにせ初恋の相手だし。

そんな綾瀬は泣きながら俺に謝った。「僕のせいでごめんね。雪くんが遊べなくなってごめんね」と何度も謝った。

あの泣き顔はいまだに忘れられない。可哀想とか思ったわけじゃない。

可愛かった。あの泣き顔は本当に可愛かった。

「綾瀬が女だったらなぁ……」

洗面台に両手をついて、ガックリと項垂れる。

綾瀬が女だったら。これはもうほぼ毎日考えている。

だが、だがしかし！　もし綾瀬が女だったら！

「絶対に俺なんか相手にされねェよな……」

美形なわけでもなし、頭がいいわけでもなし、運動が得意なわけでもない、凡百を絵に描いたようなこの俺なんか……。

「見向きもされねェよ。もしかしたら石ころを見るような目で見下されていたかもしれねェ」

そうなんだよなぁ。綾瀬は男だから俺のそばにいてくれるんだよ。もし女だったら、俺なんか絶対に相手にされねェ。

複雑な気分だぜ。ため息しか出ねェ。

「まあいいか。朝飯食おう……」

朝から鬱になり、大きなため息をはいて洗面所を出た。

朝飯を食い終わり、再度歯を磨く。

「あんたも毎日頑張るわね。まあ、綾瀬ちゃんに嫌われたら、あんたには生きる希望がなくなるしね」

「うるへェよ。ほっとけよ」

俺の後ろに立って呆れた顔の母。

お袋ェ、どうか俺をほっといてくれ。

『おはようございまーす』

玄関から聞こえた綾瀬の声。いつもながら可愛い声だ。
綾瀬は声変わりはしねェのかな？　できればして欲しくねェな。

「ほら急ぎなさい！　綾瀬ちゃんを待たせるんじゃないわよバカ息子！」
「わーってるよ！　いいからほっといてくれよお母様！」

ペシンと俺の頭を叩くお袋。
うがいをしてそのお袋を睨むと急いで玄関へと向かった。

だが妙だな。お袋は綾瀬のことを「綾瀬くん」って呼んでいたはずだが。
綾瀬が女の子に見られることを気にしていると思い、お袋はこれまで一度も「綾瀬ちゃん」なんて呼んだことはなかったはずだ。
ちなみにガキの頃は「あーくん」って呼んでいた。
なんだ？　なんだかやけに引っかかる。

「おはよ、雪くん」
「ああ、おはよう、あや……せ？」

玄関に立つ綾瀬。いつものように交わした挨拶。
だが俺の目は綾瀬に釘付けになっていた。

天使だ。俺の目の前に天使が立っている。
「どうしたの？　ぼーっとして」
「……なあ綾瀬ェ、それはなんのつもりだコラ」
首を傾げる綾瀬。いや可愛いよお前は。
だが、だがな、さすがにこれは笑えねェ冗談だ。
「なんで女用の制服を着てんだよ。今日は学校で仮装大会でもあるのか？」
「あ、これ？　どうかな？　似合うかな？」
顔を赤らめて恥ずかしそうに笑う綾瀬は、その場でクルリと一回転した。
短めのスカートがふわりと舞い、綾瀬のほのかに甘い香りが風に乗って俺の鼻をくすぐる。
白いシャツに青いリボンネクタイ。その上から羽織ったベージュのブレザー。そして紺と緑と赤の短めなタータンチェックのスカート。
似合うか……だと？　似合うかだとォ！　似合ってるに決まってんじゃねェかよォ！
落ち着け俺、まず落ち着くんだ俺。
学校で仮装大会なんて催しは存在しねェ。それに綾瀬が女装する理由も何一つ思い浮かばねェ。
「おい綾瀬ェ、簡潔に説明しろ。お前は何がしたいんだ？」
「あ、雪くん、ほっぺたに歯磨き粉がついてるよ？」

靴を脱いで玄関から廊下に上がった綾瀬は、俺に近づくと俺の首に両手を回して踵を上げて背伸びし、そして俺の頬を舌でペロッと舐めた。

おいィィィィ！　朝から何サービスしてくれちゃってんのお前ェェェェ！

「止めろバカっ！」

「あうっ！」

綾瀬を突き飛ばしてその場に尻餅をつき、床にしこたまケツを打ち付けた。

ケツが、ケツがイテェ。

「いたたた、お尻ぶっちゃたよ……」

声がする方へ視線を向けると、俺と同じように床に尻餅をついた綾瀬が、痛そうに顔を歪めている。

「あ、綾瀬、わるい……はいィィィィ！？」

俺の正面に尻餅をついている状態の綾瀬は、俺のアングルからはスカートの中身が丸見えだった。

パンツが見えちゃってるんですけどォォォォォ！

なんだ、なんなんだ一体？　これは一体どう言うことだ？　なぜ綾瀬が女装している？　なぜ綾瀬のパンツが見えている？　なぜピンクなんだ？

凄くいい……。ってそうじゃねェだろォ！

「雪くんは大丈夫？　ケガしてない？　ごめんね、ちょっと調子に乗り過ぎちゃった」

四つん這いになった綾瀬が俺の方へとにじり寄って来る。

綾瀬が動く度に、たゆんと揺れる胸。

あ？　胸？　ムネェェェエエエ！？

「ねえ雪くん、僕は変じゃないかな？　気持ち悪くないかな？　本当は凄く怖くて心臓が破れちゃいそうなんだよ。ねえ雪くん……」

頬を赤く染めた綾瀬は、恥ずかしいような不安なような複雑な表情で、四つん這いのまま一歩ずつ俺に近寄って来る。

変？　気持ち悪い？　それはない。それどころか、今日の綾瀬はいつにも増して可愛いような気がする。

いや、確実に可愛くなっている。

前髪を押さえたヘヤピン。いつもより大きく潤んだ瞳。赤く色づいた頬。プルンとした薄桃色の唇。サラサラで柔らかそうな髪。透き通るように白い肌。

それだけじゃない。綾瀬はかなり痩せていたはずだ。だからといって、現在は太っているわけじゃない。

なんと言うか、全体的に丸みを帯びているというか、どう見ても男の体型じゃない。童顔な綾瀬に不釣り合いな、たわわに実った胸も原因の一つなのか？

「あ、綾瀬……お前は……男、だよ、な？」

俺の問い掛けと同時に、スパーンッ！　という軽やかな音が辺りに響き渡る。
頭に走る鈍痛。
「イテェェェェ！？　なんだ！？　隕石でも降って来たのか！？」
「このバカ息子ォ！　綾瀬ちゃんになんて失礼なことを言うのよ！　綾瀬ちゃんは女の子に決まってるでしょうが！」
見上げると、仁王立ちした鬼がいた。
「ごめんね綾瀬ちゃん。ウチのバカ息子はまだ寝ぼけてるみたいで」
四つん這いのままの綾瀬に笑顔で語りかけた鬼は、その場にしゃがんで俺の耳を摘まみ上げる。
「イデデデデ！　もげるもげる！　マジでもげるって！」
「あんたねェ、綾瀬ちゃんみたいに可愛い子が、あんたみたいな唐変木を好きになってくれる確率なんて、本来なら目の前でビックバンが起きる確率より低いのよ。わかる？　要するにゼロよ。いいえ、マイナスよ」
さすがは俺の母親。よくわかっていらっしゃる。確かに綾瀬が女なら俺を好きになる確率なんてゼロだろう。
だが、だがしかし！　残念ながら綾瀬は男なんだよバカ野郎ォ！
「何言ってんだよお袋ェ！　綾瀬は男だろうが！」
「なん……だと？」
お袋の体から黒いオーラが噴出し始める。

ヤベェ、なんでかしらんがマジギレしてやがる……。

「起きろバカ息子ォ！　目覚めろバカ息子ォ！　さっさと覚醒しろォ！」

「ぐへェ！？　うぼろァ！？　ぷるぽォ！？」

強烈なショートアッパーで体を宙に浮かせられ、そこから膝が腹にめり込み、跳び上がったお袋は変則高速回転胴回し蹴りを俺の頭部に炸裂させた。

し、死ぬ、マジで死んでしまう……。

床に叩きつけられて痙攣する俺と、スタッと華麗に着地する一人の修羅。

「反省して成仏しなさい、この薄ら唐変朴念仁」

「あぷぅェ……」

ドガッと修羅の足が俺の頭部を踏みつける。

ビクビクと痙攣する体。ミシミシと悲鳴を上げる俺の頭部。

俺は開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまった。修羅を本気で怒らせてしまった。このままだと頭を潰される。そして確実に殺される。

「雪くん！　しっかりして雪くん！」

死神が鎌を構えてニヤリと笑った時、女神が舞い降りた。

俺を包み込む柔らかで暖かな感触。ほのかに甘い香り。

「おばさん！　僕は雪くんからなら何を言われてもいいの！　何をされてもいいの！　僕は雪くんが大好きなの！　本当に本当に大好

きなの！」

俺を抱き締めた女神は修羅を睨む。

「ぐふっ……」

女神の眼差しを受け止めきれなかったのか、吐血した修羅はよろよろと後退りして、壁に手をつくと項垂れた。

「なぜ……なぜ綾瀬ちゃんのような完璧な美少女が、ウチの木偶の坊を好きになるのよ。不可解だわ。理解できないわ。いいのかしら？　このままでいいのかしら？　私はバカ息子の母親として綾瀬ちゃんの人生を守る義務があるんじゃないかしら……」

お袋ェ……息子に対して容赦のない酷い言いようだが、おおむね大正解だぜ。

「おばさんは知ってるくせに。僕がどうして雪くんのことが大好きなのか……」

微笑む女神。まさに女神の癒し。その笑みを見た修羅は、気怠そうに頭を掻きながら大きなため息をはき、カラカラと笑った。

「まあね、ウチの息子はバカだけど、あたしは母親として胸を張って自慢の息子だって言えるわ。バカだけど、ホントどうしようもなくバカだけど」

「雪くんはバカじゃないよ、おばさん」

「そう思ってるのは綾瀬ちゃんだけよ。そして、ずっとそう思っていて欲しいっておばさんは思ってる。いつか綾瀬ちゃんがおばさんの娘になってくれたならって、そう思ってる」

修羅らしからぬ爽やかな笑顔。

「それはちょっと高望みし過ぎかしら？」

「お、およめ……僕は……雪くんのおよめさんに……僕は……」

燃えるように顔を真っ赤にさせた女神は、強く俺を抱き締めてブツブツと呟いている。

どうでもいいが、俺の顔に当たっている柔らかな物体は、もしかしてシリコンか？

「ほら雪匡（ゆきまさ）！　あんたはいつまでセクハラしてんのよ！　あれくらいで死ぬほど軟な育て方をした覚えはないわ！　さっさと起きなさい！」

「イデェ！？　イチイチ蹴るんじゃねェよ！？　バカがもっとバカになっちまうじゃねェかよ！」

ゴンッとスリッパを履いたつま先で俺の頭を蹴るお袋。

まあ、確かに俺の体は異様に頑丈だ。自分でもたまにスゲェって思うくらい頑丈だ。

ふっ、修羅の子はやはり修羅なのか……。

シリアルな笑顔（と自分で思いつつ）を浮かべながら起き上ると、横からいきなり俺に抱きついた綾瀬が、俺の頬にキスをした。

潤いを帯びた柔らかな感触。

あまりの不意打ちに驚くことすら忘れていた。

「あい？」

「あとで全部説明するから。だから……その時、僕の体を見て、雪

くん……」

呆然とする俺の耳元に唇をつけた綾瀬が、そう囁いた。

綾瀬ェ！　耳を舌でチロチロ舐めるんじゃねェ！　あん、とか言っちゃいそうじゃねえかバカ野郎ゥ！

全くわけがわからねェ。俺はまだ寝てるのか？

そうか、なるほど、これは夢か。納得した。

納得したァ！

恥ずかしそうに笑う綾瀬がその場に立ち上がり、俺の手を握って引き寄せる。

されるがままの俺は、綾瀬のキスを受けた頬を擦りながら、全ては夢なんだと確信して立ち上がった。

夢だ。これは夢なんだ。夢だから何をしたって許されるんだ。

なあ綾瀬ェ、おっぱい揉んでもいいか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6568y/

Ｐａｎｉｃ　Ａｔｔａｃｋ！

2011年11月19日23時50分発行